

## Emily Dickinson と東洋思想 (1)

鵜野 ひろ子

Emily Dickinson and Eastern Thought (1)

UNO Hiroko

## 要 旨

Emily Dickinson は1846年15歳の時、Chinese Museum を見学した際、展示物よりも元阿片患者の中国人ガイドが語った、阿片中毒克服のため彼等が行った“self denial”に興味を抱いた。既に中国についての知識があった故に派手な展示物に目を奪われることなく、そのような精神的なものに興味を引かれたに違いない。当時の米国における中国についての情報源を調べたところ、彼女はキリスト教宣教師、ボストンの貿易業者、米国の政治家から成る、東洋進出を狙う共同体という環境に育ち、宣教師の情報誌 *the Missionary Herald* や *the Chinese Repository* 等を通して中国についての情報が身近にあり、仏教や阿片貿易による悲劇等についての知識も得ていた可能性が高い。アマストでの宗教復興運動の最中、宗教告白できず鬱状態になっていた時に“self denial”に出会ったため、その体験は彼女の心の奥に根付いたと思われる。その影響はすぐには現れなくとも、中国の歴史や思想についての知識と相まって、後の隠遁という生き方や、「沈黙」や「無」等、詩の中に見られる否定的概念を高く評価する考え方に現れたものと思われる（否定的概念については拙著 *Emily Dickinson's Marble Disc* で論じている。）。

**キーワード：**エミリー・ディキンソン、東洋思想、阿片貿易、『中国についての知識の宝庫』

## Abstract

When Emily Dickinson visited the Chinese Museum in Boston at the age of fifteen in 1846, she must have already known a great deal about Chinese culture and history, so she was perhaps less interested in the magnificent Chinese exhibits than in the explanation given by two Chinese guides and ex-opium smokers of the “self denial” way of conquering opium addiction.

An investigation of the sources of information about China, especially about Buddhism, available in the United States in the early nineteenth century, reveals that Christian missionaries sent back information on Eastern thought such as Buddhism and Confucianism through their bulletins: the *Missionary Herald* from the 1820s and the *Chinese Repository* from the 1830s. The poet grew up among Boston traders, Christian missionaries, and American politicians, who cooperated in order to further the expansion into China: Boston traders wanted free trade with China, missionaries wanted to save Chinese souls, and American politicians wanted to establish diplomatic relations with China. So Dickinson would have been familiar with Chinese culture and history, including the tragedy caused by opium.

Dickinson came across “self denial” while she was staying with her aunt in Boston to throw off the depression that was caused in part by being unable to make a confession in the religious revivals in Amherst. The idea of “self denial” must have taken deep root in her mind. Its influence did not appear immediately, but became apparent later with her knowledge of Eastern thought and the history of China, in her choice of seclusion in her later life and in her evaluation of negatives such as “silence” and “nothingness” found in her poetry (I discuss this in my book *Emily Dickinson's Marble Disc: A Poetics of Renunciation and Science*).

**Keywords:** Emily Dickinson, Eastern thought, opium trade, *Chinese Repository*

拙著 *Emily Dickinson Visits Boston* (1990) で指摘したように、Emily Dickinson は1846年15歳の時、ボストンで Chinese Museum を見学した。それは米国で初めての期間限定の中国展で、等身大の人形も使った豪華なものであった。15歳の少女であれば、そのエキゾチックな品々に目を奪われたはずである。ところが彼女は中国からやって来て、展示を解説していた二人の中国人の元阿片患者が語った阿片中毒の克服を可能とした “self denial” に興味を引かれたと手紙に書いている (L-13, Boston, 8 September 1846)。そこで、Chinese Museum がどのようなものであったか、またその体験が彼女の詩にどのように表れているかを “Emily Dickinson’s Encounter with the East: Chinese Museum in Boston” (2008) という論文で発表した。すると何人もの中国の研究者が彼女の詩の中に仏教、道教、あるいは儒教に通じている詩があるなどと論じる論文を発表した<sup>1)</sup>。しかし彼女がいつ、どのようにして東洋の思想や宗教に触れたかという事実関係については、Chinese Museum での体験とそこで来場者に渡された解説書以外、不明であったが、田中泰賢が Dickinson と文通を続けていた評論家 Thomas Wentworth Higginson が1871年と1872年に発表した論考 “The Buddhist Path of Virtue” と “The Character of Buddha” が彼女に影響を与えたのではないかと、それ故彼女の幾つかの詩と禅との間に類似点があるのではないかと指摘している。

一方、著者は彼女の東洋的な思考はもっと早い時期に形成されたと考える。Chinese Museum を見物した時も、中国の歴史や仏教等の知識が既にあつたからこそ、派手な展示物に目を奪われることなく、“self denial” という精神的なものに興味を抱いたのではないかと、仏教等についての知識があつたからこそ、1840年代、50年代のアマストにおける Revival の中でも体制に流されず、宗教告白をしないという強い意志を通せたのではないかと彼女の「沈黙」や「無」といった否定的概念を高く評価する東洋的と言える美学<sup>2)</sup>や、1860年以降の隠遁という生き方には、参政権が無いなどの女性差別や米国の外交政策に対する反発、また健康問題等、様々な原因はあつたようであるが、中国についての知識も影響した可能性があると考えられる。そこで今回は、彼女が十代の頃にどのようなルートで中国、特に中国の思想についての情報を得ていたかについて調べた。

Thomas A. Tweed の *The American Encounter with Buddhism, 1844-1912* (2000) によれば、かつては、米国には19世紀初めから旅行者や宣教師、外交官達から様々な「異教の」宗教についての断片的な報告がもたらされていたものの、保守的なキリスト教信者には興味を抱かせず、1880年代になってようやく仏教に対抗してのキリスト教擁護や仏教への好奇心といった反応が現れたとされてきた。しかし Tweed は、もっと早い時期の1830年代、40年代の欧州での仏教研究やニューイングランドの超絶主義者によって1844年頃から米国で仏教が知られるようになり、1850年代には仏陀がイエスやモハメッド、孔子らと共に宗教の開祖として話題にのぼるようになったと言う (xxx)。具体的には、1844年に仏国で Eugène Burnouf (1801-52) が出版した『印度仏教の歴史序説』 (*Introduction a l’histoire du Buddhisme indien*) が欧州での仏教について

の研究の基礎となったが、彼について学んだ米国人 Edward Elbridge Salisbury (1814-1901)<sup>3)</sup> が同年5月28日にボストンで開催された the American Oriental Society の最初の年次大会で欧州における仏教研究についての講演 “Memoir on the History of Buddhism”<sup>4)</sup> を行ったことによって、仏教が米国に紹介されたと言う (xxxi)。

また Tweed によれば、Salisbury の講演の数ヶ月前に Elizabeth Palmer Peabody (1804-1894) が Burnouf の業績の一つである *Lotus Sutra* の仏語訳の一部を英語に翻訳し、1844年1月発行の超絶主義機関誌 *The Dial* に “The Preaching of Buddha” (391-401) として発表した<sup>5)</sup>。その記事の冒頭で、翻訳したのはネパールの仏教の経典の一つである “White Lotus of the Good Law” の抜粋であること、原本はカトマンズ在住の英国人 Hodgson (Brian Houghton Hodgson: 1801-1894) からパリのアジア協会に送られた膨大な仏典のほんの一部であること、そしてその仏典は Burnouf が研究している最中であることが記されている<sup>6)</sup>。また Burnouf の書いた仏教についての「記事」も引用されていて、その中で「輪廻」が解説され、仏陀は「解脱」と呼ばれる輪廻からの解放の可能性を説いたと解説されている (391-92)。Burnouf の『法華経』の仏語訳は彼の死後、1852年に出版されたもので、彼の『印度仏教の歴史序説』の出版は1844年であるので (Lopez, “Burnouf” 27)、Peabody は Burnouf による仏語訳をそれ以前に手に入れたはずであるが、その経緯は不明である。ただ彼女が引用した「記事」は、最近の Donald S. Lopez, Jr. の研究によって、Burnouf が1843年に *Revue indépendante* の4月号に掲載した “Fragments des predications de Buddha” から、また彼女の仏陀についての解説は5月号に掲載した “Considérations sur l’ogitine du Bouddhisme” から引用したものだと言われた (164)。Lopez によれば、Peabody は元の論文を省略・変更したため (164-67)、『法華経』に関する正しい知識は19世紀末の Burnouf の弟子であった Friedrich Max Müller の本格的な研究まで待たなければならなかった (168-69)。

このように Tweed は「Peabody の注釈付きの仏典の翻訳と Salisbury の反響の大きかった講演が、非公式ではあるが、米国における仏教についての会話の口火を切った」(xxxi, 2) と言うが、そもそも Peabody が仏典の一部でも翻訳したという事は、それまでに仏教の知識があったからできたことではないだろうか。仏教についての情報は1820年代から皮肉にも、広東にいたキリスト教宣教師によって米国に伝えられていた。米国のプロテスタントの複数の宗派の宣教団体が1806年からボストンで発行してきた機関誌 *The Missionary Herald*<sup>7)</sup> (*MH*) には、1820年代、the London Missionary Society (LMS) から派遣され広東にいた Robert Morrison (1782-1834) からの手紙が何通も掲載されていて、米国からも宣教師を広東に派遣するようという要請と共に<sup>8)</sup> 中国についての情報が記されている。例えば1823年2月には (マラッカで1817年から1821年まで発行されていた LMS の機関誌 *the Indo-Chinese Gleaner* の著者の報告として)、“China: —Worship of Confucius” という記事が載せられている。それによれば、中国には孔子を祭る寺が1,560ほどあり、春と秋には数多くの家畜や絹が供されること、現代で最も文明が開化された異教の国の一つである中国の知識人たちが単なる人間であると誰もが認めている男を神のように崇めていること、しかも同じ教養のある異教徒たちが「死は消滅」だと信じ、神も天使も精霊も無いと断言していると書かれている (vol. 19, 56)。また『論語』が中国で最

も高く評価されている書物であること、そしてその「聖者」が神のことも知らず、死後のことも知らないと批判している (56)。Dickinson は生涯、死後の世界についてなど、信仰に悩みつづ詩を書いたが、世界にはカルヴィニズムの教えだけではなく、いろいろな異なる思想、宗教があることを知って、参考にしたに違いない。

また同年6月には、(Morrison からの情報として) 日本や韓国の人々も漢字を読むので、貿易をするにもキリスト教を広めるにも、漢字を学ぶべきだと書かれている (188)。その結果、15年後の1838年には、漢文についての論文 *A Dissertation on the Nature and Character of the Chinese System of Writing* (Peter S. Du Ponceau, Joseph Morrone and M. De la Palun) が Philadelphia の the American Philosophical Society から出版され、1839年1月の the *North American Review* (vol. 48, no. 102) にそれについての40頁近い詳細な書評が掲載された (271-310)。その中には漢字が幾つも印刷されていて (300, 302)、アルファベットだけを使ってきた人々には新鮮であったろうと推測される。なお the *North American Review* は1815年にアメリカの文化の向上のためにボストンで発刊された19世紀、20世紀における主要な雑誌の一つで、Daniel Webster についても掲載しており、Dickinson 家でも購読されていたはずである。また *MH* では、1824年10月にもキリスト教についての冊子を中国語に翻訳することを勧めている：“In China, and Japan, and Cochin China, and the islands of those seas, all the people can read, and are eager for knowledge. There, let millions of tracts be published!” (vol. 20, 332)。1825年8月には、キリスト教宣教師が中国本土に入国することが許されない以上、中国人にキリスト教を伝える手段としては、外国人が入れる広東や周辺の国々から印刷物として中国本土に潜り込ませるしかないと記している (vol. 21, 250)<sup>9)</sup>。このように、アメリカ東部の福音主義や宣教師派遣団体と関係のある信仰心の篤いキリスト教信者や教養人が中国の文化に1820年代から触れていたことがわかる。

また中国への宣教師派遣の要望は Morrison だけではなく、当時鎖国中の中国で広東においてしか貿易を許されていなかった米国の貿易業者によっても強く叫ばれていた。1830年1月の *MH* の“China”という欄には「Dr. Morrison と広東貿易に従事している米国の貿易業者、両者の要望によって」、遂にボストンに拠点を持つ海外宣教師派遣団体 the American Board of Commissioners for Foreign Missions が Rev. Elijah C. Bridgman を宣教師として広東に派遣したとある (vol. 26, 14)。以前、ボストンの貿易業者から日本開国という強い要望があったことを報告したが (Uno, “Japanese Flowers,” 62, 75, note 29)、その前の中国の場合も貿易業者とキリスト教の宣教とが結びついていたことがこの記事でわかる。また同じ *MH* の記事には、宣教師 Bridgman の使命は中国語を身に着け、特に中国語と英語による聖書などの書籍や小冊子を中国本土まで流布させ、安息日には広東に居る英米人の商人や船員に説教をし、神が道をつけて下さるのに従って、できるだけ早く奥地まで中国本土の人々に宣教することだと書かれていて (14)<sup>10)</sup>、その後も毎号に彼の動向を記している。1833年の2月には、広東で月刊誌 *The Chinese Repository* (*CR*) が発行されたこと (vol. 29, 72-73)、12月には、広東にある商館 Talbot, Olyphant & Co. や Dr. Morrison の協力のお陰でその発刊が可能となったことが報告されている (vol. 29, 452)。また Rev. Ira Tracy と Mr. Samuel Wells Williams が広東に赴くべく6月15日に Talbot, Olyphant 商会の船で NY を出立したこと、Williams は印刷者として *CR* 発行の任に就

くので、Bridgman は中国語の聖書の発行に専心できると記されている (vol. 29, 452-53)。このように、MH は CR が広東で、後にマカオで発行されてからも宣教師からの手紙や日誌を掲載し続ける一方、CR の記事も転載した。例えば1834年6月の MH には CR の “Remarks on Buddhism (sic)” (vol. 2, September 1833, 214-25) という記事が “Buddhism (sic) in China” と改題され載せられているが、孔子、老子、道教についての解説があり、チベットのダライ・ラマについても触れている (vol. 30, 234-36)。このように、キリスト教宣教の努力は、同時に、対象国の宗教を米国に伝えるものともなったのである。

Samuel Wells Williams は後に Commodore Perry の日本遠征で公式通訳も務めたが、彼こそが CR を通して中国についての詳細な情報を米国に送り続けた。彼は1833年10月末に広東に到着すると、*Repository* という名にふさわしく、あらゆる方面の情報をその雑誌に掲載した (Frederick W. Williams 54)。MH の場合は米国内と世界中での宣教についての情報であったが、CR は中国に限られており、広東で直に見聞された情報であるので、遥かに詳細で信頼できるものであった。例えば1835年の *the North American Review* vol. 40 no. 86 の書評欄に、*the London Quarterly Review* for January 1834 の記事が転載されているが、その中で、1834年1月号の CR のお陰で前号で掲載した記事の間違いを訂正することができたとある (January 1835: 58-68)。また *the North American Review* の1836年7月号には、1835年の CR が中国についてあらゆる正確な情報を掲載していて興味深いという好評が載せられている。そこにも書かれているように、CR の情報は宣教関係だけでなく多岐に亘っていた。第1巻 (1832年5月～1833年4月) には433もの項目がある。例えば “Chinese, their religions,” “Chinese, their morals and their habits” 等、宗教や思想関係の情報、“China, origin of the name,” “Chinese, their dress” 等、文化について、“Maps, the Chinese,” “Policy of the Chinese” 等、政治的な情報や、“Macao, actual state of its commerce, public buildings, & c.,” “Tea” 等、情報が満載である。

広東には三角貿易で阿片を売って巨万の財を築いたボストンの貿易業者 Thomas Handasyd Perkins (1764-1854)<sup>11)</sup> の商館や倉庫があったので、そこからの情報も含まれていたと思われるが、阿片戦争 (1840年6月～1842年8月) 勃発の直前の CR 第8巻 (1839年5月～1840年4月) には “Opium trade, management of,” “Opium, abuses of,” “Opium, prices of,” “Opium shortens life,” “Opium traffic, crisis in,” “Opium, the victimized smoker of” 等、阿片関係の記事が30項目、1842年の第11巻には18項目もある。例えば、“Remarks on the present crisis in the opium traffic...” (vol. 8, no. 1, 1-8) という記事には、阿片は「肉体及び精神に対する害毒」であり、阿片患者はこれまで見た中で最も哀れな存在で、親族からも憐れみと恥の対象とされている。また阿片によって金持ちは貧しくなり、中産階級の者は乞食となり、欲しくても阿片を手に入れられずに自殺したり、盗みを働いて処刑された者が大勢いると言う。そして阿片貿易は “the fruitful source of evils, destroying life, property, and morals” (3-4) と非難している。その記事の次には、清国の長官から英国女王に、阿片の密輸を取り締まることを要望する手紙 “Letter to the Queen of England from the imperial commissioner and the provincial authorities requiring the interdiction of opium” (9-12) が掲載されているが、阿片による破滅から国を守るため、英国の援助を懇願する涙ぐましい努力が窺える<sup>12)</sup>。

Williams は後に出版した *The Middle Kingdom; A Survey of the Geography, Government, Education, Social Life, Art, Religion, & c., of the Chinese Empire and Its Inhabitants* (1848) の中でも、阿片の悲劇について多くの頁を割いているが (381-95)、阿片が中毒者に与える害だけでなく、絶望的になった被害者が阿片を手に入れるため、あるいはその影響から逃れるために犯す犯罪は、窃盗、放火、殺人、自殺と、限りないと言う。そして一旦、中毒になってしまうと、克服することはほとんど不可能だと解説している：

Few, very few, however, ever emancipate themselves from the tyrannous habit which enslaves them; they are able to resist its insidious effects until the habit has become strong, and the resolution to break it off is generally delayed until their chains are forged, and deliverance felt to be hopeless. (394)

Dickinson が元阿片中毒者と話をした時、阿片中毒を克服するための “self denial” に興味を持ったということは、このような記事を読んでいたからであろう。著者は彼女が米国の外交政策等に批判的であったと推測する者であるが (「日本の開国」276-89)、阿片貿易や阿片戦争についても心を痛めていたからかもしれない。

阿片戦争 (1840年6月28日～1842年8月29日) やその後の中国についての情報は米国の政治家が最も知りたいことであった。CR の第8巻には “Foreigners, confinement of” 等の情報も記されている。また第9巻には “Canton, list of officers at,” “British forces in China” 等、とても宣教師の仕事とは思えない情報が多々見られる<sup>13)</sup>。そしてホイッグ党の国会議員 Caleb Cushing (1800-1879) が1844年5月に Tyler 大統領の命により清国駐在弁務官としてマカオにやってきて、6月からは特命全権公使の信任を受けて貿易協定について交渉した際には、1835年12月に当地に移っていた Williams が彼の助手として活躍した。1845年の CR には “Message from the president of the United States to the senate, transmitting the treaty concluded between Mr. Cushing and Kiying in behalf of their respective governments” という記事 (vol. 14, no. 9, 410-23) があり、1844年の米中の協定締結の過程や Bridgman が英訳した中国側と取り交わした書類、Cushing の詳細な報告などが掲載されている。しかもその最後には1843年5月8日付のワシントンから発信された当時の国務長官 Daniel Webster から Cushing への詳細な指示が掲載されている (419-23)。このように Williams のマカオでの活動は当時の米国の貿易業者だけでなく、外交政治とも深く結びついていた<sup>14)</sup>。言い換えれば、宣教団体、貿易業者、政治家、それら三者が互いを必要とし、協力し合っていたのである。

詩人の祖父 Samuel Fowler Dickinson (1775-1838) は19世紀初め、カルヴィニズムが忘れられたハーバード大学に対抗して、宣教師を養成することを目的としたアマスト大学の創設者の一人であり、父親 Edward も Webster が1849年から死ぬまで名誉会員であった American Board に1852年から会員となり、1858年からは Emily を含めた Dickinson 家全員が名誉会員になっている (Uno, “Japanese Flowers” 62-63)。彼はホイッグ党の政治家でもあり、マサチューセッツ州議会議員 (1842-43)、知事諮問委員会委員 (1846-47)、さらには国会議員 (1854-55) も務め (Longworth 67-70)、Webster<sup>15)</sup> だけでなく Cushing とも関係があったはずである。詩人の母方の Norcross 家にはボストンで中国の陶器を扱った Otis Norcross (23 and 24 S. Market)<sup>16)</sup>

や織物を扱った Loring Norcross (22 Kilby)<sup>17)</sup> 等、輸入業者がいて、他の Norcross 家の人々 (Erasmus 及び Joel W.) も手伝っていた (Uno, *Boston*, 10-11, 48)。

政治家 Caleb Cushing の場合、父親がマサチューセッツ州ニューベリーポートにおける造船業と西印度諸島での奴隷貿易で1840年までに財を築いていた (Johnson 174)。1846年の *Adams's New Directory of the City of Boston* には、“Cushing C. ship and merchandise broker, 86 State” (43) とあるが、1844年8月に特命全権公使の職務を終え、1847年にマサチューセッツ州下院議員に再選されるまでの間、職業をそのように称していたようである。また同じ *Directory* には、親戚の Abel, Abner L. や Henry L. といった counsellors (弁護士) (9 State, h. 24 Essex) (42-43) の他に、“Cushing Thomas P, merchant, 65 Congress, h. 4 Mt. Vernon” 及び “Cushing (Nathan) & Clapp (T. G.) W. India goods, 29 Commercial. Boards Fulton House” (43) が記されていて、彼等も彼の親戚と思われる。Kendall Johnson によれば、阿片を含む広東貿易や奴隷貿易で有名な Perkins & Co. は Caleb Cushing の母方の叔父である James と Thomas Handasyd Perkins 兄弟の会社である。1786年に Thomas Handasyd Perkins が兄の James と友人と共に立ち上げた Perkins, Burling & Perkins という会社は1792年に広東貿易を始めた時、James & Thomas H. Perkins と名称を変え、その後も度々名前を変えている。Caleb Cushing の従兄 John Perkins Cushing (1787-1862) もその会社を手伝って、巨万の財を築いている (Downs 150-51)。さらに、Robert Bennet Forbes (1804-1889)、John Murray Forbes (1813-1898) 兄弟も、Perkins 家の親戚であり (Johnson 174)、彼等も阿片貿易で巨万の富を蓄えている (Downs 159-60 他)<sup>18)</sup>。Caleb Cushing 自身は貿易業を避け政治家になったが (Johnson 174)、貿易協定を締結のためマカオに派遣されたのは、広東貿易業者が親類に大勢いたからに違いない。

このように、Dickinson 家にも、Cushing 家にも、親類の中に貿易業者がいた。また同じ *Directory* によれば、1846年当時、彼らの店舗あるいは事務所が Kilby Street や State Street に集中している。Robert Forbes と John Murray Forbes の事務所は48 State street で、William Forbes の事務所は26 State street であり、Cushing の事務所の86 State street や W. R. Norcross の16 Merchants' Row などと目と鼻の先である。Loring Norcross の事務所は22 Kilby および11 Dorane で、Otis Norcross の店舗が23 and 24 South Market であるので、彼ら全ての事務所・店舗が直径2分の1マイルほどのボストンの商業の中心地にあったことがわかる。Emily の叔母の夫、Loring Norcross の扱った織物が中国からのものかどうかは不明であるが、Otis Norcross は中国陶器を扱っているので、Thomas P. & Co. を介していた可能性がある。ただ、American Board に協力したニューヨークの貿易業者 David Washington Cincinnatus Olyphant (1789-1851) だけは阿片貿易を痛烈に非難し、当時の広東貿易業者としては珍しく、阿片を扱わなかった (Downs 207)。それ故、Norcross 家は Olyphant & Co. と提携していたかもしれないが、Perkins 兄弟や親族はマサチューセッツ総合病院や the Boston Athenaeum などの設立に寄与し、鉄道その他の事業でボストンの発展に寄与していた (Johnson 59-61) ので、無視できなかったであろう。

このように Dickinson は東洋進出を狙う宣教師、貿易業者、政治家という三者の共同体の正にその真ただ中に、10代、20代を過ごした。それ故、子供の頃から東洋での宣教活動の他に、

東洋の歴史や文化、政治、貿易について見聞きしていたに違いない。例えば、1846年6月の彼女の手紙には、印度から一時帰国中の宣教師 Dr. Scudder が講演をしていると書かれている (L-12)<sup>19</sup>。彼女は他の一時帰国宣教師の講演も聴いたことであろう。しかも身内に居る貿易業者や政治家である父親からも東洋についての情報が得られたであろう。このように彼女の周りには一般の家庭と違って東洋についての情報があつた。それ故、阿片貿易についても早くから知っていたと推測される。

Emily Dickinson が見学した1845年から46年にかけてボストンで開催された Chinese Museum は1844年7月3日に米国と中国との間で初めて締結された協定 (The Treaty of Wang Hiya) のお土産のようなものであつた。別の拙論 (“Chinese Museum”) で論じたので簡単に記すが、Chinese Museum は Caleb Cushing に同行した John R. Peter Jr. が貿易協定の締結後もマカオに残り、中国の文化を米国で紹介するため数多くの品々を持ち帰って展示したものである (48-52)。その際、中国が野蛮な国ではないことを示すため中国人の商人と米国人の宣教師が協力したと言われているが (Haddad 7)、その宣教師の一人が Samuel Wells Williams だと思われる。そして彼はその直後の1844年11月にマカオを立ち、1年近くかけて東南アジアや欧州を巡り、印刷のための漢字のフォントやタイプを手に入れるため、またそのための資金を集めるため、米国に一時帰国する。彼は1845年10月にニューヨークに帰ると、1846年にかけて、ニューイングランド地方の様々な場所で100回以上、中国についての講演を行い (Uno, “Japanese Flowers” 58-59)、その内容は *The Middle Kingdom* (前出 p. 119) という二巻のイラスト入りの書物となって、ロンドンとニューヨークで1848年に出版されている。丁度、同じ時期にボストンで開催されていた Chinese Museum と相まって大勢の人々に中国の文化を印象付けたことと思われる。Tweed は Salisbury の講演と Peabody の法華経の翻訳が米国での仏教についての会話の始まりだと言うが、このように Chinese Museum や Williams の講演、著作も大きく貢献したのである。*The Middle Kingdom* の第18章 “Religion of the Chinese” には、中国人が「ローマカトリック教徒と同様に、純潔や隠遁を、魂と肉体を最高に卓越した存在に近づける手段として、称え崇めている」(232) とある。もし Dickinson がこの講演を聞くか、この書物を読んでいたら、その後、隠遁生活に入る際に影響があつたかもしれない。

Dickinson は Chinese Museum が開催されていたボストンに滞在した理由として、健康に優れず意気消沈していたので、両親が気遣ってボストンに気分転換のため行かせてくれたと書いているが (L-13, Boston, 8 September 1846)、一年前の手紙でも “I was down-spirited” や “I am rather low-spirited” (L-8, 25 September 1845) と書いており、また1846年1月には、一年前からアマストで Revival が盛んなのに、自分は Christian になれないという悩みを友人に告白している (L-10, 31 January 1846)。同じ年の3月、6月にも同様の悩みを打ち明けているところから (L-11, L-12)、アマストにおける宗教復興運動の中で宗教的な悩みから鬱状態となり、体調も崩していたことが窺える。それで母親の妹で彼女のお気に入りの叔母の Lavinia (1812-1860) と貿易業者の夫の Loring W. Norcross (1808-1863) の家に預けられたようである。当時ボストンでは既にカルヴィニズムは廃れ、ユニテリア派が主流となっていて、超絶主義者たちの活動も盛んであつた。Norcross 家の人々は先進的な考えを持ち、Emily の母方の祖父である Joel

Norcross (1776-1846) は1804年に科学教育を重視した Monson Academy を創設している (Bernhard, “Norcross, Joel” 213)。これは父方の祖父が1814年に Amherst Academy を創設する10年も前のことである。そして詩人の母親 Emily Norcross は Monson Academy で、ラテン語、Natural Philosophy, Astronomy, Chemistry, Botany, Physiology, Geography, Algebra, Logic History, Rhetoric を学んだ (Ackmann 17)<sup>20)</sup>。Martha Ackmann は、多くの人々が女子に教育は不要だ、女性の生殖能力に害があると考えていた時代に非常に先進的な学校を創立し、娘にも学ばせていることから、Norcross 家の人々は独自の考えを持つ nonconformists、体制に安易に従わない人々だと言っている (17)。

一方、Dickinson 家も詩人の祖父が Amherst Academy を1814年に創立し、科学を重視する Amherst College の創設にも貢献した。しかし Amherst College は元々、宣教師養成を目的としたものであった。また Habegger によれば、詩人の父親 Edward は、若い頃、論文を書くほど、女性の教育について興味を抱き、検討した結果、女性は男性に守られなければならないという確固たる信念を持ち、婚約者の Emily Norcross に女性作家による文学作品を読むようにと促しながら、一方で、女性は男性と議論するよりも常に顔を隠して家に居なければならないという、矛盾に満ちた信念を妻に押し付けた (45-48)。後に詩人が Thomas W. Higginson への手紙の中で、「父は書物を沢山買ってくれます—でも読まないでくれと言います—書物が精神を惑わすのが心配だからと言うのです」 (L-261, 25 April 1862) と書いているように、彼の矛盾に満ちた態度は子供の教育にも表れていた。このように、カルヴィニズムに忠実で、女性観も保守的で、ホイッグ党の頑固な政治家である父親と、進歩的な考えがあってもそれを表現させてもらえない母親との間で、詩人の宗教上の悩みはより深くなったのではないかと推測できる。その結果、鬱状態になっている彼女を一時、ボストンの自由な家風の Norcross 家に避難させたのではないだろうか。

このように、東洋進出を狙う宣教師、貿易業者、政治家の共同体という特殊な環境の中で育ち、中国の文化・歴史についても知識のあった思春期の詩人が、宗教復興運動の真只中で、信仰に悩み、鬱状態にまでなっていた時期に、たまたま Chinese Museum を見学し、そこで “self denial” によって阿片中毒を克服した人に出会ったわけである。Chinese Museum の開催された建物 Marlboro Chapel (Washington Street, between Winter and Broomfield) (Uno, “Chinese Museum” 51, 54-55) は Elizabeth Peabody の書店の本の目と鼻の先に位置していたので、その書店にも立ち寄ったかもしれない。また Peabody の “The Preaching of Buddha” を読んだかもしれない。それはともかく、Chinese Museum での体験は彼女の心に、深く、強い印象として根付いたに違いない。そのような影響はすぐには現れなくとも、中国の歴史や思想についての知識と相まって、後に隠遁という生き方や、彼女の詩の中で「沈黙」や「無」等、否定的概念を尊重する考え方 (Uno, *Marble Disc*) として現れたのではないかとと思われる。

## Appendix : Dickinson と Peabody

『法華経』の一部だけとはいえ、世界で初めて英語に翻訳した Elizabeth Palmer Peabody は当時の女性としては珍しく、教育、超絶主義運動、社会改革、著作、編集、出版等、様々な分野で活躍したが、特に独逸人の Friedrich Froebel の教育法に従い、1860年にボストンにおいて米国で初めての英語による幼稚園を創設した。後に1867年から1870年まで西欧を旅し、Froebel の教育法を直に学び、米国に最初の free public-school を開設し、*Kindergarten Messenger* という雑誌を発行し講演をするなどして幼稚園を米国中に普及させた。また1840年から1852年まで住んでいたボストンの街の中心にある West Street の自宅で、1842年に書店を開いた。George Willis Cooke によれば、その書店はボストンで初めて外国の書物を扱う店で、特に仏語と独語の本が置かれており海外発注もできた (*An Historical and Biographical Introduction* 147)。彼女は当時としては珍しく、広く徹底した教育を受けており、ラテン語、仏語、独語に堪能であった (143) ため実現できたようである。また書店の奥で、William Ellery Channing, Ralph Waldo Emerson 等、超絶主義者達が集まって討論したことは有名である。さらにその書店では月々一定の料金で本を回覧できるシステムを導入した。また彼女は超絶主義の機関誌 *The Dial* の出版業務に1844年まで2年間携わっただけでなく、Margaret Fuller が *The Dial* の編集をやめた後、編集にも関わった (Ronda 206)。

Peabody は1844年1月、自身が編集をした *The Dial* に “The Preaching of Buddha” として、『法華経』の一部を仏語から英語に翻訳したものに解説を付けて掲載した。『法華経』の英訳に関しては、矢崎正見の論文「法華経伝訳とその形態」(1965)によると、「オランダのケルンがフランス語訳と同じくネパール梵本より1884年に翻訳した “The Lotus of the true Law”」と、「イギリスのリチャード Richard が1910年にエジンバラにおいて出版した大乘仏教の新約聖書 “The New Testament of High Buddhism” に「蓮華教精卒」“The Lotus Scripture Essence” と題し妙法蓮華経28品の大略を韻文風に抄訳、出版」(244) したもののしか知られていない。それ故、Peabody が経典の一部であれ、世界で初めて英語に翻訳し、仏教についての知識をアメリカで紹介したということは注目すべきことである。しかしそれは1993年に Wendell Piez がその間違いを指摘するまで (Tweed xvi)、一世紀以上もの間、Henry David Thoreau の業績とされてきた。しかも間違いが訂正されたにもかかわらず、1999年出版の Ronda の Peabody の伝記に触れられていない。また日本で2000年に出版された Burnouf についての論文の中でも、それが Thoreau の訳とされている (Akira Yuyama 1, 2, 67)。更に現在も、インターネットの *The Walden Woods Project* というサイトでは Thoreau の作とされたままである。

その間違いの原因は、19世紀の雑誌ではよくあったように、無記名だったからであるが、Piez と Tweed (xvi) によれば、さらに悪いことに、ユニテリアンの牧師で超絶主義作家に関して多数著作のある George Willis Cooke が1885年に *The Journal of Speculative Philosophy* に掲載した記事 “‘The Dial’: An Historical and Biographical Introduction” につけた「執筆者リスト」(225-65) の中で、それが Thoreau によるものと記したためであった：“391. The Preaching of Buddha. (Selections) H. D. Thoreau. (265).” ただ、その雑誌の同じ号の後方の「訂正欄」に、それが “Miss E. P. Peabody” によって Burnouf から翻訳されたものだということがわかった

と、記されている：

The following corrections have been received since the article on “The Dial” was printed.

The extracts made from “The White Lotus of the Good Law” were by Miss E. P. Peabody, and translated from Burnouf.... (322) (underline mine)

しかし、この訂正文に書かれた “The White Lotus of the Good Law” という題名は彼女の翻訳した抜粋の元の題名であって、彼女の記事の題名、即ち執筆者リストにある記事の題名 “The Preaching of Buddha” とは異なっている。そのため、訂正されていることに読者が気付かないのは当然のことだと思われる。

しかも同じく Cooke が1902年に出版した *the Dial* についての著作 *An Historical and Biographical Introduction to accompany the Dial* の中に “Peabody” についての章があるが、仏典の翻訳については一切触れていない。一方、同じ本の “Thoreau as Contributor and Assistant Editor” という章の中では、1844年の1月号のために彼が「おそらく」「Ethnical Scriptures」のシリーズの一つとして、“The Preaching of Buddha” を選んだのであろう (134) とある。しかし仏典の翻訳を誰がしたかについては一切触れていない。19世紀中頃に米国で、書籍の海外発注や独逸の幼稚園の普及の他に、中国の仏教の紹介という、大洋を跨ぐ活躍をした女性がいたにもかかわらず、その業績が長い間表に出ていなかったことは遺憾である。Piez は *Tricycle* という雑誌の中でその翻訳者についての間違いを指摘した際、その記事に “Anonymous Was a Woman—Again” という題目を付けている。女性の業績が黙殺される例が他にも幾つもあるからであろう。

Dickinson と Peabody との関係については、次のことがわかっている。Dickinson の叔母 Lavinia Norcross の娘たち Louisa Norcross (1842-1896) と Frances Norcross (1847-1919) は Emily Dickinson より10歳以上、年下であるが、詩人が最期まで最も心を開いていた従姉妹であり、思想的にも近かったと思われる。彼女らはボストンで生まれ育ったが、1860年代初め、両親が相次いで亡くなり、親戚を転々とした後、ケンブリッジの下宿屋に住み、その間に詩人が1864年と1865年に、その都度半年近くその下宿に身を寄せ、ボストンの眼科医の治療を受けた。さらに彼女らは親類の家とボストンのホテルに長期滞在した後、1873年にコンコードに移り、当地の超絶主義者たちと交流を持ち、死ぬまで彼らと共に文化的な活動を行った (Habegger 398-99, 545; Ackmann 19-20)。

彼女らがボストンのホテルに滞在していた1872年後半に、Dickinson が Louise に宛てた手紙の中で “Miss P—” から手紙をもらったことが記されている (L-380)<sup>21)</sup>。この “Miss P—” と省略されている女性について、書簡を編纂した Thomas H. Johnson は、多分 Higginson の知人の Elizabeth Stuart Phelps のことだろうとしているが (*Letters*, 500) が、Habegger は Elizabeth Peabody の可能性もあるとしている (545)。確証はできないが、Louise がボストンのホテルに長期滞在していた1872年までに、“Miss P—” と知り合っており、Dickinson の詩を見せたことがあったからこそ、“Miss P—” から Dickinson に働きかけがあったのだと考えられる。また Peabody が既に1859年からコンコードに住んでいたことを考慮すると、“Miss P—” は Peabody であって、彼女が住んでいたからこそ、また Norcross 姉妹が早くから超絶主義に興味があったからこそ、1873年にコンコードに移り住んで、Peabody を含む超絶主義者らと交流したと考

えるのが自然ではないかと思われる<sup>22)</sup>。

この論文は2019年5月26日、安田女子大学で開催された日本英文学会2019年度大会におけるシンポジウム「大洋を渡るアメリカ女性詩人たち」で、口頭発表したものに加筆したものである。

## 注

- 1) 例えば、次の論文がある：  
Hsu, Li-Hsin. “Emily Dickinson’s Asian Consumption.” *The Emily Dickinson Journal*, vol. 22, no. 2, 2013, pp. 1-25.  
Yanbin, Kang. “Towards a Chinese Perspective on Dickinson.” *Literature Compass*, vol. 11, no. 3, 2014, pp. 149-58.  
---. “Dickinson’s Hummingbirds, Circumference, and Chinese Poetics.” *The Emily Dickinson Journal*, vol. 20, no. 2, 2011, pp. 57-82.  
---. “Dickinson’s No-body, No-mind, and Non-action.” *A Quarterly Journal of Short Articles, Notes and Reviews*, vol. 28, no. 2, 2015, pp. 110-17.  
Katz, Adam. “Sunna at the Bone: Emily Dickinson’s Theravadin Romanticism.” *Buddhist-Christian Studies*, vol. 35, 2015, pp. 111-19.
- 2) See Uno, “Part I: Silence and Nothingness” in *Emily Dickinson’s Marble Disc*.
- 3) なお、Salisbury は1841年から1854年までイエール大学でアラビア語やサンスクリット語を教えていたので、Benjamin Silliman の同僚であった。それ故、1846年にイエール大学を初め、ニューイングランド地方で中国について講演を行った Samuel Wells Williams (Uno, “Japanese Flowers,” pp. 58-59) とも会っているはずである。
- 4) その内容は、*Journal of the American Oriental Society* 1, 1844, pp. 81-135に、“Memoir on the History of Buddhism read before the American Oriental Society...” として掲載されている。またその記事は *The Chinese Repository* vol. 14 (1845)にも掲載されている (423-35)。なお、Salisbury は後に同じ *Journal* の第3巻 (1853) に“United States Expedition to Japan”と題して、1852年11月に Perry がアナポリスを出立したと、香港で他の戦艦と合流すること、まもなく目的地に到着するだろうことを報告し、その帝国 (日本) について更なる知識が得られることを期待すると書いている。また実際には国務長官である Webster が書いた Millard Fillmore 大統領から日本の皇帝への手紙も掲載している (492-94)。
- 5) 田中泰賢が論文「超絶主義季刊誌『ダイアル』に書かれた「仏陀の教え」の大意」の中で“The Preaching of Buddha”は『法華経』の「薬草喻品」の翻訳だとしている (377)。
- 6) 坂本幸男編『法華経の思想と文化』(1965)の中の第二篇「法華経典の伝播史的形態」の第一章である矢崎正見の「法華経伝訳とその形態」でも、「フランス訳本」について、「フランスのビュルヌーフがイギリスの駐ネパール公使であったホジソン Hodgson から贈られたネパール本によって翻訳した二巻本でその表題を“La Lotus de la bonne Loi”といい、ビュルヌーフの死後パリで出版せられ、翻訳とノートから成っている」(243-44)と、同様のことが記されている。
- 7) 1806年から *The Panoplist* という名前で発行されてきたが、1820年から *The Missionary Herald* と改称された。
- 8) 1822年には、彼が日本へも宣教師を派遣する希望を持ち始めたことが報告されている (vol. 17, 331)。
- 9) 1829年には、“Preparation of the Scriptures for the Japanese”と題して、聖書の中国語訳が日本人にも理解されるには、どのような工夫が必要かを知るためにも日本についての知識が必要なので、Mr. Medhurst が日本の書物を手に入れたこと、その結果、日本の歴史やキリスト教が禁教だという事がわかり、さらには、かな等、日本の言語についての知識を得たことが報告されている (vol. 25, 193-94)。
- 10) *MH* vol. 25 (Nov. 1829) の“Mission to China”という記事にも同様のことが書かれている (364-65)。
- 11) Thomas Handasyd Perkins は1793年までハイチで奴隷売買や毛皮を扱う北西部貿易に携わっていたが、1785年よりボストン商人として初めて広東貿易を始めた。初めは米国の朝鮮人参や毛皮を広東で売り、茶や絹を米国に持ち帰っていたが、1815年からはトルコで阿片を仕入れ、中国で売り、巨万の富

を得た。特に広東に商館と倉庫を建て、将来性を見込んだ親類の若者をそこに常駐させ、好機に商品を売り買いすることで成功を取めた (Haddad, *Adventure* 32-37)。彼は後にマサチューセッツ州内でバンカーヒル記念碑を建設するため大理石を切り出し運ぶ鉄道会社等、多くの事業に投資し、また晩年には the Boston Athenaeum 等、多くの文化事業に寄付し、慈善事業でも有名である (“The Biography of Thomas Handasyd Perkins”)。

- 12) その手紙の一部を引用する：

That in the ways of heaven no partiality exists, and no sanction is allowed to the injuring of others for the advantage of one's self,—that in men's natural desires there is not any great diversity (for where is he who does not abhor death and seek life?)—these are universally acknowledged principles. And your honorable nation...acknowledges the same ways of heaven, the same human nature, and has the like perception of the distinctions between life and death, benefit and injury....

...How can it be borne that the living souls that dwell within these seas, should be left willfully to take a deadly poison! Hence it is, that those who deal in opium, or who inhale its fumes, within this land, are all now to be subjected to severest punishment, and that a perpetual interdict is to be placed on the practice so extensively prevailing.

We have reflected, that this poisonous article is the clandestine manufacture of artful schemers and depraved people of various tribes under the dominion of your honorable nation.... And we have heard that in your honorable nation, too, the people are not permitted to inhale the drug, and that offenders in this particular expose themselves to sure punishment. It is clearly from a knowledge of its injurious effects on man, that you have directed severe prohibitions against it. But what is the prohibition of its use, in comparison with the prohibition of its being sold—of its being manufactured,—as a means of thoroughly purifying the source? (9-10)

- 13) Samuel Williams は牧師に任命されたことはなく、missionary printer としてマカオに派遣され、1850年代60年代には外交官の役目を果たしたが、1857年に American Board を辞し、1870年代後半、イェール大学の教授となった (Johnson 139-40)。
- 14) Williams の記事の中には日本に関する記事も多数あったので、後に Webster が推進した日本遠征の際、Perry が Williams を通訳として採用したのも当然のことと思われる。
- 15) Dickinson 家には、Edward Dickinson 所蔵の書籍として、Webster の著作物が多数あり、中には Webster 自身から贈られた、署名付きの書籍 *Speech of...to the young men of Albany* (1851?) や *Pamphlets. 4 1851-1876* もある。また Edward Dickinson は1852年6月のホイッグ党大会で大統領候補者として Webster の応援演説をしている。
- 16) Dickinson Homestead の敷地内にある Austin Dickinson の家には、制作年代は不明だが、今も数多くの中国陶器が残されている。(Courtesy, Emily Dickinson Museum)
- 17) 1846年の *Adams's New Directory of the City of Boston* の “Business Directory” には、“Dry Goods—Importers: Importers and Jobbers” の欄に Loring Norcross の名前がある (123)。Uno, “Chinese Museum” p. 46を参照。
- 18) Robert B. Forbes の自伝 *Personal Reminiscences* によれば、彼が広東に渡った1818年には、John P. Cushing は Perkins & Co. を任せられており、Forbes は彼の下で広東貿易を学んだと言う (41)。なお、ボストン郊外のミルトンにある、Forbes が母親の為に建てた屋敷には、数多くの中国の品々と共に、阿片パイプが展示されている。
- 19) この Dr. Scudder は John Scudder Sr. (1793-1855) だと思われる。彼は New Jersey 生まれで、Princeton Univ. と New York College of Physicians and Surgeons を卒業しニューヨークで医者として成功していたが、1819年、American Board から東洋に宣教師として派遣され、セイロンにアジアで初めての Western Medical Mission を設立し、また病院も開設してコレラや黄熱病の治療をした。1836年からはタミール語で聖書を発行するためインドのマドラスに移り、インドで初めての医療宣教師となった。そして1842年から1846年まで健康のため休暇をとり米国に一時帰国しているので、その間にアマストで講演をしたようである。彼はまたその間に、“Appeal to Youth in Behalf of the Heathen” (1846) と

“Letters to Pious Young Men” (1846) を出版しており、MHにも記事を發表しているのので、Dickinsonは講演を聞いただけでなく、彼の記事も読んだ可能性がある。

- 20) Joel Norcross は Monson Academy のためロンドンから科学教育の教材や道具を取り寄せている。Emily Norcross はそこで学んだ後、New Haven の Mr. Herrick’s school で学んだ。なお、Monson Academy はイェール大学とも密接な関係があり、多くの卒業生がそこで教鞭をとり、当時 Benjamin Silliman が率先していた自然科学の研究・教育を取り入れていた (Ackmann 17)。それ故、詩人の自然科学に対する興味は母方の Norcross 家譲りだったと言える。さらに、その学校では詩の朗読やディベイト、自分の創作した文学作品の発表も盛んに行われていたようで、Houghton Library には Emily Norcross の当時の創作作品が保存されている (18)。従来、彼女は無力な母親と言われてきたが、実際には詩人への影響力が大きかったと思われる。
- 21) “Of Miss P—I know but this, dear. She wrote me in October, requesting me to aid the world by my chirrup more. Perhaps she stated it as my duty, I don’t distinctly remember, and always burn such letters, so I cannot obtain it now. I replied declining. She did not write to me again—she might have been offended, or perhaps is extricating huminity (sic) from some hopeless ditch...” (L-380, late 1872)
- 22) Martha Ackmann は、1876年に Abbie May Alcott が作った the Concord Saturday Club に Norcross 姉妹も 1877年から死ぬまで会員だったということから、未出版の文学作品も読まれたそのクラブで、Dickinson の詩も読まれた可能性があると推測している (19-20)。逆に、Dickinson が Peabody の記事を読んだ可能性もある。

## Works Cited

- Ackmann, Martha. “Biographical Studies of Dickinson.” *The Emily Dickinson Handbook*. Eds. Gudrun Grabber, Roland Hagenbüchle, and Cristanne Miller. Univ. of Massachusetts Press, 1998, pp. 11-23.
- Adams’s *New Directory of the City of Boston... and an Almanac, from July 1846 to July 1847*. George Adams, 1846.
- Bernhard, Mary Elizabeth Kromer. “Norcross, Joel,” *An Emily Dickinson Encyclopedia*, Ed. Jane Donahue Eberwein. Greenwood Press, 1998, p. 213.
- . “Norcross, Lavinia (1812-1860) and Loring (1808-1863),” *An Emily Dickinson Encyclopedia*, pp. 214-15.
- Cooke, George Willis. *An Historical and Biographical Introduction to accompany the Dial as reprinted in numbers for the Rowfant Club*. Rowfant Club, 1902.
- . “‘The Dial’: An Historical and Biographical Introduction, with a List of the Contributors.” *The Journal of Speculative Philosophy* vol. 19, no. 3, July 1885, pp. 225-65.
- Downs, Jacques M. *The Golden Ghetto*. Hong Kong UP, 2014.
- Forbes, Robert B. *Personal Reminiscences*. Little, Brown, 1878.
- Habegger, Alfred. *My Wars Are Laid Away in Books: the Life of Emily Dickinson*. Random House, 2001.
- Haddad, John Rogers. *America’s first Adventure in China*. Temple UP, 2014.
- . *The Romance of China: Excursions to China in U. S. Culture: 1776-1876*.  
<http://www.gutenberg-e.org/haj01/frames/fhaj21.html> 14 Feb. 2007.
- Johnson, Kendall A. *The New Middle Kingdom*. John Hopkins UP, 2017.
- Johnson, Thomas H. and Theodora Ward, eds. *The Letters of Emily Dickinson*. 3 vols. Harvard UP, 1958. Citation by letter number.
- Longworth, Polly. “Dickinson, Edward (1803-1874).” *An Emily Dickinson Encyclopedia*, pp. 67-70.
- Lopez, Donald S. Jr. *The Lotus Sutra: A Biography*. Princeton UP, 2016.
- . “Burnouf and the Birth of Buddhist Studies.” *The Eastern Buddhist*, vol. 43, no. 1/2, 2012, pp. 25-34. JSTOR, [www.jstor.org/stable/44362463](http://www.jstor.org/stable/44362463).
- Piez, Wendell. “Anonymous Was a Woman—Again.” *Tricycle: the Buddhist Review*, Fall, 1993.  
<https://tricycle.org/magazine/anonymous-was-woman-again-s/2018/11/04>.
- [Review] “The London Quarterly Review for January 1834. Article VII. On Free Trade to China by; the Chinese

- Repository for January 1834.” *The North American Review*, vol. 40, no. 86, Jan. 1835, pp. 58–68. (JSTOR, stable, 25103826)
- [Review] “ART. VII. — *A Dissertation on the Nature and Character of the Chinese System of Writing; in a Letter to John Vaughan, Esq.*” *The North American Review*, vol. 48, no. 102, Jan. 1839, pp. 271–310. (JSTOR, stable, 25103722)
- Ronda, Bruce A. *Elizabeth Palmer Peabody: A Reformer on her own Terms*. Harvard UP, 1999.
- Salisbury, Edward E. “Memoir on the History of Buddhism, Read before the American Oriental Society, at their Annual Meeting, in Boston, May 28, 1844,” *Journal of the American Oriental Society* 1, 1844, pp. 81–135. Reprinted in *Buddhism in the U. S. 1840–1925*, Vol. 1: Contacts and Exchanges in Print Culture: Encountering Buddhism in U. S. Periodicals, 1844–1903. Ed. Thomas A. Tweed. Ganesha Publishing, 2004.
- Seaburg, Alan. “The Biography of Thomas Handasyd Perkins.” *The Dictionary of Unitarian & Universalist Biography*, an on-line resource of the Unitarian Universalist History & Heritage Society.  
<http://uudb.org/articles/thomasperkins.html>.
- Stimpson's Boston Directory*. Boston: Charles Stimpson, Jr., 1836.
- Tanaka, Hiroyoshi Taiken. *Buddhism in Some American Poets: Dickinson, Williams, Stevens and Snyder*. *Buddha 英語文化 田中泰賢選集 4*。あるむ、2017。
- 田中、泰賢。「超絶主義季刊誌『ダイアル』に書かれた「仏陀の教え」の大意」。『禪研究所紀要』no. 37、2009年、pp. 378–63。
- “The Preaching of Buddha.” *The Dial* No. XV (vol. VI, no. 3), Jan. 1844, pp. 391–401.
- Tweed, Thomas A. *The American Encounter with Buddhism, 1844–1912*. Revised Paperback edition. The University of North Carolina Press, 2000.
- Uno, Hiroko. “Emily Dickinson and Japanese Flowers: Her Herbarium and Perry’s Expedition to Japan.” *The Emily Dickinson Journal*, vol. 26, no. 1, 2017, pp. 51–79.
- . *Emily Dickinson Visits Boston*. Yamaguchi Publishing House, 1990.
- . “Emily Dickinson’s Encounter with the East: Chinese Museum in Boston.” *The Emily Dickinson Journal*, vol. 17, no. 1, 2008, pp. 43–67.
- . *Emily Dickinson’s Marble Disc: A Poetics of Renunciation and Science*. Eihōsha, 2002.
- . “Emily Dickinson’s Seclusion and Japan.” *Kobe College Studies*, vol. 58, no. 2, 2011, pp. 129–50.
- 鶴野、ひろ子。「エミリ・ディキンソンと日本の開国」。新倉俊一編『エミリ・ディキンソンの詩の世界』。国文社、2011年、pp. 276–91。
- Williams, Frederick Wells. *The Life and Letters of Samuel Wells Williams, LL. D.: Missionary, Diplomatist, Sinologue*. G. P. Putnam’s Sons, 1889.
- Williams, Samuel Wells. *The Middle Kingdom: A Survey of the Geography, Government, Education, Social Life, Arts, Religion, & c., of the Chinese Empire and Its Inhabitants*. 2 Volumes. George Palmer Putnam, 1848.
- 矢崎、正見。「法華経典の伝播史的形態」。坂本幸男編『法華経の思想と文化』。永楽寺書店、1965、pp. 227–48。
- Yuyama, Akira. “Eugene Burnouf: the Background to his Research into the Lotus Sutra.” Ed. Yuichi Kajiyama *Bibliotheca Philologica et Philosophica Buddhica* vol. 3. the International Research Institute for Advanced Buddhism, Soka University, PDF-Version, 2000.  
<https://web.archive.org/web/20070705053724/http://iriab.soka.ac.jp/orc/Publications/BPB/pdf/BPPB-03.pdf>
- The Chinese Repository*
- The Missionary Herald*

(原稿受理日 2019年9月16日)